

# PHOTO ESSAY-24-

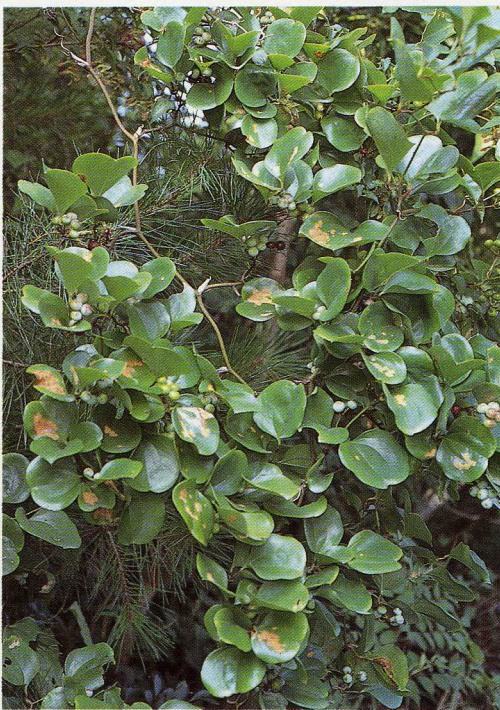
## 東広島キャンパスの植物

文写真 児島葉子

(Kojima, Yoko)

理学研究科生物科学専攻

博士課程前期1年



▲柏餅という名の和菓子

▲林縁に繁茂するサルトリイバラ

### サルトリイバラ

*Smilax china*

サルトリイバラの葉を見つけると、喜んで採つて帰った幼い日の記憶がある。なめらかで光沢のある丸い葉を使って、春の彼岸の頃ともなると祖母が柏餅を作ってくれたものだ。

サルトリイバラと聞いてぴんとこなくとも、柏餅を包んでいる葉と聞くとイメージできる人も多いのではないかろうか。本来、柏餅はカシワ(テナ科の木本)の葉が使われている。しかし、広島県のようにカシワがあまり生育しない地方では代わりにサルトリイバラの葉が使われているのだ。恥ずかしながら、徳島生まれのわたしは大学生になるまで、サルトリイバラの葉をカシワだと想いこんでいた。

サルトリイバラ(猿捕り茨)の名前の由来は、読んで字のごとく、刺のある茎を伸ばし、巻きひげを利用して枝から枝へとからみつくことから、猿もひつかかるということによるそうだ。他にサルカキイバラ、モガキイバラ、カカラなどの方言があり、広島ではカタラの葉とも呼ばれているそうだ。

わたしは植物の調査のためによく山に行くのだが、山の中でサルトリイバラに行く手を阻まれると、幼い頃の甘い記憶はどこへやら、思わず顔をしかめてしまう。そこを通り抜けようものなら、手足は生傷だらけになってしまいます。

学名の *Smilax* はギリシャ語の「引っかく」、*china* は「中国の」という意味。わが

国から中国にかけて自生しているユリ科のつる植物である。

東広島キャンパス内のががら山などでは、林内のいたるところで見られ、少し開けた場所や林縁など、光のよく当たるところではよく茂っている。

ふだんは見過ごされがちのサルトリイバラであるが、秋になると朱紅色の実が目立つ。実は丸くてつやがあり、数個ずつたまつて垂れ下がる。ただし、全ての株に実が付くのではなく雌株だけに付く。最近はドライフラワーとしても人気があるようだ。

サルトリイバラは、別名サンキライ(山帰来)とも呼ばれている。昔、不純な遊びをして性病にかかる若者が山に捨てられたところ、サルトリイバラの根のおかげで病気が全快し、元気に山から帰つて来た。このことよりサンキライ(山帰来)と呼ばれるようになつたという。根茎はステロイド系サポニンを含み、利尿、解毒、浄血の作用があり、民間薬として古くから知られている。

関西では昔からカシワと同様に、餅や団子を包む風習があるサルトリイバラだが、若い葉はゆで水にさらしておひたしとして、また実は生で食べられるそうだ。第三次世界大戦中には、葉は茶や煙草の代用品にもされたそうで、硬い茎で箸や楊枝をつくることもあつたようだ。サルトリイバラと人間は、昔はもっと親しい関係だったことがしのばれる。

歳時記では、春の花に注目して春の季語とされている。「岩の上に咲いてこぼれぬ山帰来」村上鬼城。

山帰来

村上鬼城。